『アルバイト』

作者　淺羽　一

『サンタクロース急募！業種・荷物配送。深夜手当有り』

別に、大した理由があったというわけではなかった。ほんの少しだけ、そのチラシを捨てるのを待った事に。

言ってみれば、暇だったのだ。三日後に控えたクリスマスを目前にした昨日、半年以上も付き合ってきた彼女と大喧嘩をし、本当にする事がなかった。

金ならあった。だって、その日の為に三ヶ月間もひたすら寝る間を削ってバイトをしたのだから。正直、普通の大学生のくせに社会人以上に働いていたと思う。だから、金を稼ぎたかったというわけではなかった。

…ただ、暇だったのだ。

現実的に見れば、時間が余っているとは言い難い。なぜなら、漠然と考えていた「将来」というものが、いつの間にか音もなく接近していた事実を、ようやくだが認識し始め、俺たちは否応なく変わり出している。例えば髪を黒く染め、例えばスーツを買ってきて、例えばデートの時間を減らして…。人に誇れる夢など無いが、人に恥じる過去も無い。けれどそんな自分だからこそ、人と同じように生きなければならず、けれどそんな自分だからこそ、せっかくの特別な日くらい特別な祝い方をしたいと思って、結局はそんな自分だからこそ、肝心の祝うべき相手とその想いを見失っていた。

…分かっている。悪かったのは自分だと。でも…。

「今さら、だよな」

そう、もう手遅れなのだ。だって、時間は巻戻らないのだから。…いや、巻き戻せないのだから。

「サンタ、か」

手の中にあるチラシを眺めながら、ぼんやりと夢想する。白いモコモコの付いた赤い服を着て、同色の帽子を被り、フワフワの白い髭を蓄え、大きな袋を肩に提げて、トナカイのソリに乗って、夜空に瞬く星明かりの合間を縫って風のごとく駆ける、そんな自分。

やがて、いつしか俺はある部屋へと辿り着き、そこで眠る人の枕元へと、大きな大きな袋の中から…。

「愛してるって言葉の方が良いだなんて、勝手だよ」

必死で金を貯めて買った指輪じゃなくて、普段は恥ずかしすぎて言えない「想い」を取り出していた。

「………くそ。それくらい、分かってるよ」

やはり俺は万人に夢を与えるサンタになれそうもない。だって俺が夢を与えたいのは、いや、一緒に夢を見たいのは、億の人の中でたった一人だけなのだから。詰まる所、それこそが俺にとっての「夢」なのだ。

「…今から、だよな」

時間の向きなどどうって事ない。だって、まだ今日は今日のままで。流星みたいに空を滑るトナカイのソリなど無くたって、思い切り走れば明日の夜には間に合うだろうから。

そして俺はチラシを丸めてポケットに突っ込む。

「本気で走ったりとかなんて、ガキの頃以来かもな」

とりあえず、最初に謝って「愛している」と言おう。

〈了〉